

蕪木 寿江

一月二十一日

ダンボール箱を押して遊んでいても他の友達がいると、「どいてください。危ないですよ」と断って走るなど今まで考えられないことだ。外のお店やさんでは、「二万円以上お買い上げの方には手作りケーキを進呈いたします」などと呼びかけをしていた。朝はジュースを飲んできたと話し、「先生も飲みたいでしょう」と言う。「ありがとう」というとにっこり笑う。リズム劇「空の色はなぜ青い」の配役一覧表を紙に書いて貼っておくと自分の名前の下に、「ともゆき」と書き、ともゆ



痛い痛いのとんでいけ その七

——就学ということ——

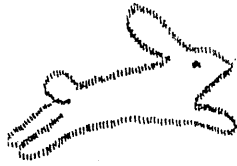
きの名前のところを消して「みのる」と書く。「K夫ちゃんが子どもがやりたい、といったから書いたのよ」と言う、「ともゆきちゃんと一緒に大人（役柄）になりたいから」と言う。「わかったわ」と言うと何度も、「ともゆきちゃんと一緒にやりたいから」と繰返した。お弁当の時カレーカールが床に落ちたのでしようへいちゃんが拾ってあげると、「ありがとう」と言った。「K夫ちゃん、ありがとうがすぐ言えて偉いのね」と言うると他の友達も嬉しそうにK夫をふりむいた。

一月二十二日

「クロスワードをやってみてください」と言
って縦横に枠を引いて友達の名前を「この中
に書いて下さい」と言う。書いてあげるとし
ばらくそれで遊ぶ。お弁当の時ヤクルトをと
もゆきちゃんにあげる。「ありがとう」と言
われると首をすくめる。(暗黙の諒承でK夫
だけは好きなものをお弁当に持ってきてい
る)

一月二十三日

友達の名前を道具箱を見ながら紙に書いて
友達を椅子に座らせて男の子は○○くん、女
の子は○○ちゃんと一人ずつ呼んだ。みんな
「ハイ」と手をあげて返事をする。「今日、お
弁当持ってきた人」と聞いても水曜日でお弁
当がない日なので誰も手をあげない。続いて
「明日お弁当持ってくる人」と言うと「ハイ」



とみんなが手をあげるのを待っていた。クロ
スワードはお母さんが大好きでよくやってい
ると聞いた。靴箱に自分で上履き、下靴を入
れるようになった。

一月二十四日

昨日書いた友達の名前の紙のことを「重要
書類はどこですか?」と聞いて、それを今度
はバス毎に書き直す。お誕生会が始まるとは
しゃいで舞台上る友達のことを一人ずつぶ
ったりしていたが、そのうちに落ちついて座
っていた。お弁当の時バターロールを持って
きたのをともゆきちゃんにあげた。友達にあ
げるのが面白くてたまらなくなったようであ
る。午後からリズム劇の練習をすると、「どう
して自分で言いたくないことを言わなきゃい
けないの?」と聞く。全くこちらが教えられ
る。ごっこ遊びの劇を通して子どもから出る

言葉を待つべきだったのだろう。

まさちゃんが昨日サイクリング道路でK夫ちゃんに逢ったらK夫の方から、「さようなら」と言った話をしてくれる。

一月二十五日

ひらがな積木の中から「よ・し・だ・と・も・ゆ・き」と取って箱の中に入れて引っぱって歩き、「この中に何が入っているか？」と言って友達にあてさせていた。友達がわからないでいると、「大事なもの」と言った。十時半にお弁当にしようと言ったが、「もう少し待てる？」と言うとそのまま忘れて高鬼をして遊んだ。先生方が、「K夫ちゃん、どこにいるかわからないわね」と喜んで話していた。みんなと同じような遊び方をしていた。お弁当の時、例の重要書類を持ってバス毎に名前を呼んだ。今日は名前を呼ぶたびに相手の顔



をよく見ていた。ちづちゃんが「ハイ」と手をあげると、「よいお返事ですな」と言った。

一月二十六日

ひらがな積木から、しょうへい、ちづ、の名前を探して箱の中に入れて押して歩く。じゅんちゃんの名前も覚えた。まさしちゃんの名前はまだ覚えられず、「なんて名前だっけ」と聞く。友達がサッカーボールを蹴っているとその仲間に入る。走るのがとても早くなり、足どりがしっかりしてきた。お帰りの時に又、K夫が出席を取る。友達が大きな声で手をあげる。隣の部屋から節分の歌が聞こえてくると、「鬼のうた、歌ってますね」と言った。みどり組も歌うと元気な声をだした。開心のないものは見えなかったり、聞こえなかったりしたが、興味の範囲も広がった。S先生がくると、「何ていう名前ですか？」と聞

いた。

一月二十八日

「昨日、おばあちゃんの家へ行ったよ」と部屋へ入ってくるとすぐ告げた。年賀状のお年玉プレゼントがあたってなかったの、おばあちゃんの家のはどうかしら？と見に行ったのだそうだ。豆まきの栞をつくっていると、「僕もつくろよ」と言っていて一緒に厚紙で折った。帰ってから、バスで三つ目の隣の小学校に面接に行った。(学区の学校は断わられたので)二時間待たされたがお母さんを困らせなかったと電話があった。十一月の中旬からもう就学の為の身体検査や知能テストが行なわれていた。

一月二十九日

六年生に連れられて五人ずつ検査を受け



る。K夫も難なくすませたが、多分就学猶予していることだろう、校長室に呼ばれた。丁度先客が帰られたあとでお茶とお菓子が出されてかたづけられてなかった。K夫は自分達の為に用意されたものと受けとめて、校長先生とお母さんの前にそれを運んだ。食べることのあまり好きでないK夫にとっては最大のサービスだったのだろう。校長先生が、「そこにおいておきなさい、そのまま、そのまま」と手振りで制するのも知らん顔でお茶とお菓子を運んでしまった。校長先生が、「お話ししましょう、ここへ座って」と言われると、「どうして、どうして」と落ちつかなくなった。「こんなことではとてもうちでは見られない」と言った。「知能はありますが、しかし、言うことを聞かないからね、学校では見きれない」と言われた。お母さんは、「お願いしまし」と頭を下げて帰ってきた。教育委員会で

は、「普通児として堂々と学校へ行きなさい」と言われる。校長先生の話をすると、「その時の校長の気分が悪かったのだらう。学校長になるぐらいの人なんだからそれだけの人格はある。その時だけの態度で校長先生を判断しては可哀想だ」と言われる。

三月三日

学校から電話があつて再び行く。新校舎の工事中なので落ちつけないのか、「坂がある学校へは行きたくない」と言う。「お座りなさい。お話ししましょう」と言われるが、始めちょっと座るとすぐそこらじゅうを走りまわる。「これじゃあ、とてもうちでは見きれません。普通のお子さんだったら、言えばちゃんと座りますよ」と言われる。室内の重苦しい空気がいやになったのかもしれない。「これじゃあ、とても駄目ですね」と言われる。



副校長先生もいらつして、「何か物を与えれば落ちつきますか?」と言うので、(物ではない心と言つて欲しい)「口で言えばわかります」と話す。「学校はお母さんのように一対一で話すわけにはいかない。そういうことをお望みなら特殊へ行かれた方がお子さんの為ですよ」「まだ入学してないからうまくゆくかゆかないかわからないのでは」と言う、「今、見たところではとても受け入れられません。一クラス四〇人前後ではとても目が届かないし、一緒に座っている子も落ちつかない。授業中おもしろくないからと一人で教室を出してしまうと、先生は授業を中断して捜さなければならぬ。第一父兄がだまっていけないだろう」「幼稚園ではうまくいっています」「私達は専門家ではないのでよくわかりませんが、幼稚園と学校ではやっていることが違う」「……」「専門に勉強している先生の方が本人

の為ですよ」「委員会では充分普通学級でや
っていきけると言われます」「委員会では特殊
ということでは書類がまわっています」「そん
なこと聞いていません」「しかし、まわりの
迷惑を考えたら連れてこれないでしょう。委
員会は現場のことを知らないからなあ」

「迷惑」とは一体どういうことなのだろう。
お互い人間どうし迷惑をかけあって生活して
いるではないか。校長先生は最後に、「誤解し
ないで下さい。入学するのはあなたの権利で
すから、入りたければ入学式に連れていらっ
しゃい」と言った。K夫は、「おうちに帰りた
くない。お散歩しよう。電車に乗ろう」と言
った。

よっぽど傷ついたのでだろう。幼い子どもの
前でよくもよくも話せるものだ。学校とは、
人間になる為に学ぶところではないか。教え
るとは希望を抱かせること、学ぶとは、真実



を胸に刻むこと。その入口で心を踏みつける
のか――。次の日、K夫は幼稚園に來なかつ
た。

三月四日

委員会から電話があり、昨日の話をすると
特殊の書類などまわしてない由。面接で落ち
つかなかったことを話すと、「K夫君は、感受
性が強いから、犬や猫の様に自分の事をよく
思っていない人間を感じるのではないか」と
言われる。「私としてはあまり拒否される所
へは入れたくないのですが」とお母さんが言
うと「校長先生がおっしゃるように、入れな
い、と言っていないのだから、それは我儘だ
よ」と言い、それから、「○小学校ばかりが
学校じゃあないし近所の所へ行って聞いてみ
たら」と言われる。

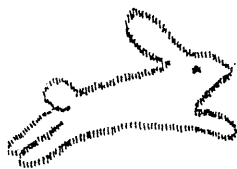
三月五日

T先生が、「K夫ちゃん、昨日どうしてお休みしたの？」と聞くと、「かなしかったから」と答えた。

三月六日

○小学校の説明会なので行くと、入口の名簿にK夫の名前はすでになかった。

国際児童年に、「国民は平等に教育を受けることができる」と定められた。そして養護学校ができた。地域の子どもは地域の子どもどうしで守られていくのに、遠い所の学校に通うはめになった。自分と違ういろいろの子どもがいるということが「共に生きる」教育の原点である筈なのに、特殊学級といっても訪ねていくと何か疑問が残る。二十数年前か、学力テストとその評価に反対して辞表をだし



た中学の先生が、その人柄に傾倒した校長先生の推薦で、障害児学級の先生になった。

「ここに三日いると可愛いくて辞められないね」と言った。その先生の話聞いて学力で人間を差別しない本来の人間教育がここに残されているように思えてその言葉に縋っていたが、K夫のような場合を見ると、心が揺れ動く。集団の中で友達どうし育ち合い、友達と遊ぶことによって自分を変えていく。障害を持った友達と一緒に生活していくことによって誰からも教えられないやさしさが、クラス全体を包む。

K夫は寄留しバス通学をして普通学級を卒業した。卒業式に出席した私はそのたくましい姿に感動した。○小学校の校長先生が言われた心配は低学年の頃の給食を除いては六年間、全くなかった。

(市ヶ尾幼稚園)